

コミュニケーション研究の 哲学的アプローチ(1)

ヤスパースの Kommunikation 概念について

米 沢 弘

Philosophical Approach about Communication (1) About Concept of Communication by Karl Jaspers

Hiroshi YONEZAWA

Communication is one of the key concepts for Karl Jaspers, which is shown in his early work, "Allgemeine Psychopathologie" (General Psychopathology) and also in his later work, "Von der Wahrheit" (On Truth). Philosophy of Jaspers is known as a philosophy of existential reason, and one of its characteristics is attaching importance to communication as a phenomenon. He introduces five modes of communication most systematically in the "Von der Wahrheit."

1. Communication of presence (Dasein = being there).
2. Communication of consciousness in general.
3. Communication of spirit.
4. Communication of existence.
5. Communication of reason.

Meaning of ego or self is different in each mode, and each mode has its own community and its own thought of truth. (The details will be explained in the text.)

The examination of Jaspers' concept of communication is able to give a wider prospect to the present studies of communication which tend to take approaches of behavioral or social science.

はじめに

「なぜコミュニケーションがあるのか？なぜ私はひとりだけではないのか？という問いの核心にふれなければならないとすれば、自己存在の問いに対する場合と同様に、そ

れに対して明確な答を与えることはほとんど不可能である。」

カール・ヤスパース

コミュニケーションについての問いは、ギリシャの昔から問はれてきた。それは伝統

的には「言語」の問題として、また「芸術」なり「思考」との関係で、さらには「教育」なり「統治の技術」として、さまざまな立場で問いつづけられている。

コミュニケーションという言葉は、ギリシャ語の *ἀνακοινῶν* とそれと関係する *κοινός* のラテン形 *communicatio* と *communis* から来た言葉で、何等かを共通するという意味である。

コミュニケーションについての最初の詳細な考察は、それが非明示的であり、コミュニケーションという言葉の使用されていないことを容認すれば、その内容の豊かさ、今日的な問題性において、アリストテレスの『詩学』と『弁論術』であることに疑いはない。

これらは「言語的コミュニケーションの内容と効果、またそののぞましい効果をもたらすための技法」についての詳細な考察である。

現在、私たちがコミュニケーションについて考える時に、多くの場合、社会科学なり行動科学的アプローチが先行するが、この種の最も初期の例は、今世紀初頭の C. S. Peirce や C. H. Cooley にはじまるが、英語での使用例は14世紀末で、コリント後書の翻訳の中に、*comynycacioun* として表記される。

コミュニケーション概念について考えるために、私自身は次のような4つの異った次元の問題のクロスの中で考えることとする。

- 第1は 明示的 (*explicit*) か非明示的 (*implicit*) か
- 第2は 通時的 (*diachronic*) に考えるか 共時的 (*synchronic*) に考えるか
- 第3は 理論言語 (*theoretical term*) と考えるか非理論言語 (*non-theoretical term*) として考えるか
- 第4は 土着言語 (*indigenous concept*) として捉えるか非土着言語 (*non-indigenous concept*) として捉えるか

以上4つの異った次元とそのクロスである。もっともこれ等の問題に、さらにアプローチの違いや、ディシプリンの違い、さらにインターディシプリナリイなアプローチの問題が加わる。

今回は、ヤスパースのコミュニケーション概念についてだけ考察するが、ヤスパースのコミュニケーション概念を考えるために、上記のクロスしたフレームの中で考えることの必要性のみを指摘するのみにとどめる。(なおこの種の問題については筆者の先行の論述(注1)について見られたい。)

コミュニケーションについての哲学的アプローチのみにかぎれば、ほぼ以下の3つのグループとその延長線上に集約できる。

第1は プラグマティズムからのアプローチで、C.S. Peirce, W. James, J. Dewey などによる考察であり

第2は 実存主義的アプローチで

K. Jaspers, J.P. Sartre
M. Heidegger などによる省察であり

第3は 論理実証主義ないしは分析哲学によるアプローチで、L. Wittgenstein, R. Carnap, A.J. Ayer などによる分析である。

もっとも、この際の哲学的アプローチの意味であるが、上記の3つの立場で若干の違いはあるが、いずれもが方法論的反省をともなった Systematik (体系性) の意味において共通するものがあるといつてよいだろう。

では何故にヤスパースのコミュニケーション概念について検討を行うかを簡単に述べておくこととしよう。

第1は 哲学的課題においてコミュニケーションについて問うことの重要さであり

第2は コミュニケーション研究における哲学的問いの重要さであり

第3は ヤスパース哲学におけるコミュニ

ケーション概念の持つ意味の重要性であり

第4は ヤスパースのコミュニケーション概念の持つ内容の豊富さである。

今回は、これらの問題の一つ一つについて検討することは頁数の関係で許されないので、主として第4の問題について述べることで、結果的に、それ以外の問題についても理解いただくこととしよう。

なお、一般にコミュニケーションという言葉は、工学系では〈通信〉と訳され、社会科学系では〈コミュニケーション〉として表記され、哲学の文献では〈交わり〉と訳されることが多いが、今回はコミュニケーションとして統一的に使用する。

なお、念のために追記すれば、情報とコミュニケーションとは対をなす概念で、コミュニケーションの概念規定として情報という言葉を用いる例はN. Wiener, G.A. Miller, W. Schramm, A.J. Ayer, E. Goffman, F.C. Johnson, B. Brelson, M. McLuhan, L. Thayer, L. Bertalanffy等数多く見られる。

この中で、最も要約されたものは F.C. Johnsonの「コミュニケーションとは情報の転移 (the transfer of information) である」とするものである。(注I参照)

コミュニケーションの諸限界

ヤスパース哲学の出発点となり、その後も増補改版されつづけた最も初期の大著『精神病理学総論』は、ヤスパース自身が「如何にして〈哲学すること〉が、具体的な科学の形態をもって起りうるかということを示すもの」とするものだが、現在私たちがヤスパースのコミュニケーションについて考えるための最も基本的な、また最も興味を持ち得る説明が同書に見出されるので、その部分から考えてみることにしよう。

同書の第6部「人間存在の全体」の第5項〈実地 (Praxis) の意味〉において、ヤスパ

ースは医師と精神病患者とのあるべきコミュニケーションについて考察する中で、コミュニケーションの諸様態 (die Weisen) について具体的に述べている。

なお、同じ問題はさらに整理された形で、『哲学』第I巻の「哲学的世界定位」第2章〈世界定位の限界〉の中で述べているので、それらをあわせて考察することとしよう。

またその際に『精神病理学総論』においては、医師と精神病患者との関係が主であるのに対して、『哲学』第I巻の中では、それ以外の患者をも含む患者一般について語っているので、単に実存的コミュニケーションの問題にとどまらず、治療的コミュニケーション (therapeutic communication) 一般について考えるために、後者の叙述から考えてみることにする。

ヤスパースによれば、医師と病人との交渉 (Umgang) において、「人間と交渉する際のすべての行動が示すところの世界定位 (Weltorientierung) の理論的ないし実践的諸限界が、それらの相関関係において例示的に明らかになる」と述べている。すなわち「同じ医療法という名称のもとに、その中の一つが他の限界であるような諸々の異質的なものが出会っている」とする。

先ず第1に、病める肉体は、一つのメカニズムとしては〈機械装置〉 (Maschinerie) と同じように考えられ、外科的手術が可能である。

第2に、生命としての肉体は、そのメカニズムをまず自ら生み出すものであり、技術的操作の場合でも計算しつくされないものである。

第3に、人間の生命は純粹に客観的なものではなく、肉体に依存するとともに自らの側から肉体を規定するところの理解可能な心を持つ生命である。そしてここに医師と病人とのコミュニケーションの問題が生ずるわけだが、そこにはしばしば悪循環が生ずる。

第4に、肉体と心から成る一つの全体とし

ての病人が、医学的知識の立場から憶測的に見通されるということで、病人の心的作用を計算に入れねばならず、医師は自らを医療過程における機能に転化させる。

第5に、〈可能的実存〉としての人間に関しては、何人も単なる〈事例〉ではなく、一箇の運命であり、客観的・対象的なものと、コミュニケーションの中に現われる実存としての人間の混合はもはや許されず、医師は技術者でもなければ救世者でもなく、実存に対する実存である。

以上のように、医療行為にそくして、いくつかの限界が示される。

第1は 単に技術的機械的なものにあつては生命が

第2は 生命にあつては心が

第3は 心にあつては可能的実存が限界として現われる。

以上は医師と患者一般について述べたものだが、『精神病理学総論』においては、医師と精神病患者との関係が主として考察されている。

同じ精神神経性の疾患の場合にも、神経症として、身体的障害をとまなう場合や、検査による所見をとまなう場合には、問題は相対的に容易であるが、それが分裂症の場合には極めて困難となる。

分裂症の場合には、患者本人が病状を認めることは、公権喪失 (capitis diminutio) を意味する。分裂症の場合には〈身一心一統一体〉としての病める人を治療することのアポリアは極端となる。

このことは、「精神療法がたやすく偽装の手段となる」危険があり、また「解くことのできない事実をかくすために科学が利用される」ことのある「科学的迷信」の危険にみちている時代においては一層注意されなければならない。

では、この際の限界とは「人間は超越とよばれる一存在の内実においてのみ運命をとま

にする伴侶である」ということである。

さらにヤスパースは、患者からみた場合の〈開示〉のプロセスを述べ、その際の抵抗として

第1は 本質においてそのまま不変であつて、ただ外面的に形成されるだけの絶対的抵抗

第2は 内面的に形成可能なものの抵抗

第3は 根源的な自己存在の抵抗

以上の3つを考える。

第1は、動物を調御する際に似たことからであり、第2は教育と訓練の問題であり、第3は実存的コミュニケーションの問題である。

これらの医師と患者とのコミュニケーションについての具体的な叙述は（但し今回は紙数の関係で極めて要約したが）ヤスパースのコミュニケーションについての考えを特徴的に例示するとともに多くの示唆を与える。

第1は、その後のヤスパースのコミュニケーションについての発展的考え方への、具体例に即しての豊富な準備となる。

第2は、治療的コミュニケーション一般への、方法論的検討に示唆を与える。

第3は、その他のジャンルのコミュニケーションのinteractionについて、明示的または非明示的に多くの指摘を与える。

以上のごとくである。

なお念のために、第3の問題について、この種の立場でマス・コミュニケーションや、教育の場を検討することの必要性を指摘することとしたい。

コミュニケーションの諸様態 (Die Weisen)

ヤスパースの著書の中では、コミュニケーションという言葉は、極めて多く使用されているが、コミュニケーションがどんな様態を持っているかについては次のようなまとまった4つの叙述がある。

第Iは、『哲学』第I巻の中での第3章「諸科学の体系性」の中での〈現実態を分節化す

る諸原理)においてである。

ここでは、ヤスパースは次のような3様態を考える。

第1は 衝動的・心的コミュニケーション
(die triebhafte-seelische Kommunikation)

第2は 一般的・精神的コミュニケーション
(die allgemeine-geistige Kommunikation)

第3は 実存的コミュニケーション (die Kommunikation der Existenz)

以上の3種類であり、ヤスパースは、4つの現実態と、その間の3つの飛躍を考える。

4つの現実態とは〈物質〉と〈生命〉と〈心〉と〈精神〉とであり、隣接する現実態相互の間には飛躍が存在する。

第IIは、『哲学』第II巻の第3章「コミュニケーション」の中で述べているもので、

第1は 現存在のコミュニケーション
(Daseinskommunikation)

第2は 実在的コミュニケーション
(Existenzielle Kommunikation)

以上の2つであり、同章において、ヤスパースは、全著作を通じて、コミュニケーションについて最も詳細に論じている。

第IIIは、『理性と実存』第3講「伝達可能性としての真理」におけるもので、

第1は 現存在のコミュニケーション
(Daseinskommunikation)

第2は 意識一般のコミュニケーション
(die Kommunikation des Bewußtsein überhaupt)

第3は 精神のコミュニケーション
(die Kommunikation des Geistes)

第4は 理性と実存のコミュニケーション
(die Kommunikation von Vernunft und Existenz)

以上の4つである。ヤスパースの哲学は実存理性の哲学と言われるが、この理性につい

ての重視は、本講演以後一層明らかになる。

第IVは、『真理について』の第II部「認識の包括者」の第3章〈認識の運動〉においてである。

その第1から第3までは『理性と実存』と同じであるが、第4が二つに分けられる。念のために記すれば、

第1は 現存在のコミュニケーション
(die Kommunikation des Daseins)

第2は 意識一般のコミュニケーション
(die Kommunikation des Bewußtsein überhaupt)

第3は 精神のコミュニケーション
(die Kommunikation des Geistes)

第4は 実存のコミュニケーション
(die Kommunikation der Existenz)

第5は 理性のコミュニケーション
(die Kommunikation der Vernunft)

以上の5つである。

これらの各段階での説明には、それぞれ特徴があり、第IIの場合は、コミュニケーションについて独立の一章をあて、とくに実存のコミュニケーションについて詳しい。

ただ今回は、極めて制約された紙数の中なので、最も整理された形の、第IVと第Vの場合について述べるにとどめざるを得ない。

第1の「現存在のコミュニケーション」ととは次のような特徴を持っている。すなわち、そこでは現存在を維持するための共同体のコミュニケーションが強要され、〈窮迫〉(Not)が人々を団結させる。必要なのはカントの言う〈非社会的社交性〉(die ungesellige Geselligkeit)が根本特徴である。そこではプラグマティックな真理概念が通用する。そしてさらに、現存在的共同体を維持するためお互いに語る (Miteinanderreden) 技術が発展しなければならない。

第2の「意識一般のコミュニケーション」とは、任意に代置可能な、相互に類似している意識の点のコミュニケーションではなく、むしろ相互に一致しているところの意識の点のコミュニケーションである。この意識の点は、可知的なものの分裂（主観と客観、形式と質量etc.）において、あらゆる論理的カテゴリーの媒介によって、すべての人に妥当するものの一般性を、否定的にも肯定的にも捉えるものである。それは意識的現存在の多様における自己同一的な意識のコミュニケーションである。ここでは、ことがらの事実性や強制的な妥当性が、論証の共通的方法によって探求される。

第3の「精神のコミュニケーション」とは、一つの全体者の理念である共同体的実体からの生産的な自己形成であり、精神は自己以外のすべてのものと区別されるが、しかしかれらを包括する秩序の中にあるものとして、かれらと同一者である。かれらは理念という共通の顯現者からして相互に伝達し合う。

真理性について言えば、第1の現存在の真理は、実践の結果明らかとなった効用性と習慣性によっており、第2の意識一般においては、強制された正確さが主張されるのに対し、第3の精神においては、理念によって保証された確信が主張されると言える。

第4の、実存のコミュニケーションとは、代置不可能な個人の間には存在するもので、現存在的現実と意識一般における普遍的妥当性と、精神における組織的存在とを保持しながら、しかし同時にそれらを突破しながら、自己自身となろうとする人々の愛の闘争において、たえずこれらをつつみながら実現される。

ところで、ここで注目されることは、実存における理性の重視で、実存的コミュニケーションには理性が遍在しているとする。

第5の、理性のコミュニケーションとは、他のすべてのコミュニケーションを担い、またひき起す。実存という地盤はその深さの内

に、包括者 (das Umgreifende) のあらゆる様態の内に現前していて一般的な絆であると同様どのような固定化からも駆り立てる不安でもあるような力を蔵している。本質から本質への本来的な伝達は理性として生ずるのであり、しかも現存在の現実性、意識一般、および精神が、いわば理性の現象の身体 (Leibe) であるような仕方においてある。いかなる瞬間にも理性はこれらなしには存在せず、これらはすべて理性によって動かされ変えられる。

なお、『真理について』の中では、以上述べてきた5つの諸様態を、次のように比較している。

第Iは、伝達において了解される共同体についてである。

先ず、現存在としては、それは生命的共感の共同体である。

意識一般としては、ある普通的なものの一般性であり、悟性的存在者としてのあらゆる人間を同一的に結合するものである。

精神の共同体としては、もろもろの成員を全体に関する知から、彼らの理念としての全体へと向かわせる統合である。

実存の共同体としては、歴史的に根據づけられている状態のなかで、無制約的・非代替的、排他的に実現されるところの、客観的に適切に観察しえず、また決して証明し得ない共同体である。

理性の共同体としては、実存の内に根據づけられている、開放された普遍的妥当性であり、また人間存在そのものの連帯性である。

第IIは、コミュニケーションの諸様態における私の意味についてである。

現存在としては、現前しているこのものであり、一生命体の非集中的な、たえず変化変転するSoseinの盲目的な我意である。

意識一般としては、〈我思う〉一般 (‘ich denke’ überhaupt) であり、私が現存在としては同時にその前から消え去るところの妥当性である。

精神としての我は、理念のあり方であり、ある包摂的な全体の内に存在して、この全体によって養われ、また正当化されている。

実存としての我は、経験的現存在を摂取しながら実現される自己存在である。

理性としての我は、実存において根據づけられた、人間存在そのものの全体的になろうとする意欲である。

なお上述来の諸様態と理性との関係については、『真理について』の第Ⅰ部「包括者の存在」の第1章〈包括者の分節化の予備的構想〉の中で詳細に論ぜられているが、本論の主題をこえる問題として今回はその説明は省略する。

また、ヤスパースのコミュニケーション論の特徴として、興味深い言語論を持っていることが注目されるが、それについては次回に述べることにしたい。

おわりに

最後に、ヤスパースのコミュニケーション概念のもたらすものについて考えてみよう。

その際に、次のような二つの立場が可能である。

第1は、主として社会科学なり行動科学なりからみた、コミュニケーション研究の(場)から、ヤスパースのコミュニケーション概念について考える立場があり、

第2は、その逆の立場で、ヤスパースの述べるコミュニケーション論から、他の諸アプローチの成果について考える立場である。

第1の立場にのみ立てば〈現実態の断層〉がかくされてしまう危険があり、第2の立場のみに立てば、第1の立場で暗々裡に志向されている諸特徴が容易に見逃されてしまう危険がある。

それ故に、この問題については、基本的には第2の立場に立ちながらも、第1の立場をも考慮し、共通の問題に注目し、媒介項を求めて行く必要があるだろう。

要約すれば、社会科学なり行動科学なりのアプローチが、主として第1の現存在のコミュニケーションと第2の意識一般のコミュニケーションをカバーし、さらに若干部分、第3の精神のコミュニケーションをカバーしようと試みるに對して、ヤスパースは、さらに実存なり理性なりの問題を提起する。

具体的には、全体として人間を理解しようとする立場であり、ヤスパースの言葉をかりれば「真のコミュニケーションは哲学の課題にあり」、諸科学的アプローチは、それぞれの真理性において、哲学することとかわかり合っているということとなる。

なお、さらに一層具体的に言えば、コミュニケーション研究一般の立場からは、ヤスパース哲学の持つ科学方法論的反省の持つ意味があり、さらに現代社会における *dyscommunication* (コミュニケーション阻害)の問題と関係し、現代における〈生き甲斐〉の回復について、ヤスパースの実存理性の哲学は、多くの展望を与えてくれると言ってよい。

また、ヤスパース自身は明示しなかったものから、(特に医師と患者との関係において)その中に含意されるものが、現在のコミュニケーション状況において有効な指摘となるものが多い。それは個々のコミュニケーション研究者の立場と出合うことにより、あらためて顕在化されるものと言ってよいだろう。

簡単な要約で、意をつくせなかったが、上記の引用部分については、幸いいずれも翻訳があるので、関心のある方々はそれらについてみられたい。なお、ドイツでは一般にヤスパース哲学は、いわゆる哲学の専門研究者よりもむしろそれ以外の人々に愛好されることが特徴的である。それはヤスパース哲学の成立の過程にもよるが、ヤスパース自身の立場とも関係していよう。

注

I 米沢弘「コミュニケーションとは何か——概念分析とモデル論の立場から——」『NHK放送文化研究年報, 24』日本放送出版協会, 昭和54年刊。

同論文では, 今回は省略した社会科学なり行動科学なりのアプローチを共時代的に考察している。またアリストテレスの『詩学』と『弁論術』(修辞学とも訳される)についても言及している。

II 引用したヤスパースの著書と, その日本語訳の当該部分を示す。

(1) Karl Jaspers : Allgemeine Psychopathologie, Achte Auflage, Berlin, Heidelberg, N.Y. 1965, S.661 ff.

内村祐之, 西丸四方, 島崎敏樹, 岡田敬蔵共訳『精神病理学総論』(上・中・下) 1956. 同書下巻 P.354 ff.

(2) Karl Jaspers : Philosophie I, Philosophische Weltorientierung, Berlin, Göttingen, Heidelberg 1932, S.122 ff. (頁数は1956年刊による)

武藤武郎『哲学I, 哲学的世界定位』創文社刊 1964. P.150 ff.

(3) Karl Jaspers, Philosophie II, Existenzzerhellung, Berlin, Göttingen, Heidelberg 1932 PP.50~60

草薙正夫, 信太正三訳『哲学II, 実存開明』創文社, 1964. PP.61~72

(4) Karl Jaspers, Vernunft u. Existenz, Serie Piper, München, 1973, S.58ff.

(初版は1935年)

草薙正夫訳『理性と実存』理想社, 1972, PP.95~138

(5) Karl Jaspers, "Von der Wahrheit" München 1958, S.370 ff.

小林靖富訳『真理について』理想社, 1977, P.288 ff.

(1980年9月22日受付)